オープンカレッジ

発音教育ＡＩツール開発と留学効果検証

英語教育のさらなる進化目指して

名城大学外国語学部教授
西尾　由里

日本語母語話者は英語発音が苦手だといわれる一方、子どもは比較的容易に流ちょうな発音を身につけることがある。この疑問を出発点に、私は音声の知覚・産出メカニズムの研究を進め、現在は人工知能（ＡＩ）・情報通信技術（ＩＣＴ）を活用した発音学習支援教材の開発と効果検証、さらに留学による学習成果の研究に取り組んでいる。

グローバル化の進展により、英語は異なる母語話者を結ぶ共通語として重要性を増している。学習指導要領の改訂により、小学校から英語教育が本格化したが、通常の言語習得には約千時間、英語は2千時間の学習が必要といわれるほど、日本語と英語は言語的距離が大きい。また発音も異なり、母音や子音、ストレス、リズム、イントネーションの習得は容易ではない。加えて、コロナ禍以降はオンライン会議や国際学会など、非言語的手がかりが限られる場面が増え、明瞭で通じやすい発音の重要性が高まっている。

一方で、小学校英語教育の現場では発音指導の97％以上は外国語指導助手（ＡＬＴ）が担っている。筆者らの調査では、回答者の80％の小学校教員が自らの発音や発音指導に自信を持てず、十分な研修機会も得られていないことが明らかになった。英語学習者だけでなく、教員への発音研修の充実も重要な課題である。

こうした課題に対応するため、学習者がいつでも利用できるＩＣＴ英語音声セルフラーニングシステムを開発した。本システムでは、母音・子音からリズム、イントネーション、音変化まで幅広い項目を学習できる。本システムの画期的な点であるが、英語母語話者の発音映像と学習者自身の発音を比較しながら学習できるほか、ＡＩによる発音評価機能も備えている。大学生を対象とした実証研究では、発音能力の向上と高い学習満足度が確認され、発音の可視化による学習効果が示された。

また、留学の教育効果についても研究を進めている。留学は語学力向上や異文化理解に有効とされるが、大学４年間を通じた成長やキャリア形成への影響は十分に検証されてこなかった。そこで、ヨーロッパ言語共通参照枠（ＣＥＦＲ）と異文化感受性発達モデル（ＤＭＩＳ）に基づく量的調査と、体験記録やインタビューの質的分析を組み合わせて検証した。その結果、留学経験者は英語力や異文化適応力を向上させるだけでなく、ＴＯＥＩＣスコアや大学の成績評価指標（ＧＰＡ）の維持・向上にもつながることが確認された。さらに、コミュニケーション能力や問題解決力などの21世紀型スキルの向上も認められ、留学経験がキャリア選択において重要な要因であることが明らかになった。

今後も、言語習得、発音教育、異文化理解の研究成果を社会へ還元し、日本の英語教育の発展に貢献していきたい。

にしお・ゆり　専門は音声学・第二言語習得論・異文化理解教育。名古屋大学国際開発研究科国際コミュニケーション専攻満期退学。博士（学術）。